

語り継ぐ平和への思い

～戦争の悲惨さを伝承する～

多くの命が失われた戦争から76年。今では、戦争や原爆を体験した人の高齢化が進み、当時の悲惨な体験や記憶の風化が懸念されています。これらの体験は、貴重な財産として後世に受け継いでいかななくてはなりません。ここ庄原市も、原爆による負傷者の看護が行われたという記録があります。原爆投下直後の状況と、そこで懸命に活動した人の話から、当時の悲惨な体験・記憶について知り、命の尊さ、平和の大切さについて考えてみましょう。

原爆負傷者の看護活動

昭和20年（1945年）8月6日8時15分、広島に投下された原爆は、多くの人の命を奪い、助かった人の心や体に深い傷を残しました。爆心地付近では、負傷しながらも動ける人たちが広島市内の広島陸軍病院戸坂分院などに收容され、軍医

や衛生兵、看護師から看護を受けていました。しかし、負傷者や遺体があまりに多く、收容できなくなったため、戸坂分院に入れない負傷者が、芸備線沿線の各分院に汽車で搬送されました。「分院」とは、戦争が激化する中で、広島陸軍病院の増床のために、各地の学校や旅館を利用して設置された負傷者のための施設で

す。その後、分院からさらに臨時の施設として「分病棟」も開設されました。庄原市には庄原・東城の2つの分院と、山内の分病棟が設置され、庄原分院・山内分病棟に約500人、東城分院に約300人の合わせて約800人が收容されたといわれています。しかし、重傷者が多かったため、收容されたその日に亡くなる人も少なくありませんでした。

各分院の悲惨な記録

原爆投下当時の記録をまとめた「広島原爆被災誌」には、分院や分病棟に関する記録が残っています。これらの一部を抜粋し、当時の状況を紹介します。

●庄原分院

昭和20年7月30日に庄原国民学校（現在の庄原小学校）に開設され、27人の職員が、約100人の疎開した軍人を診療していました。

原爆投下後、庄原駅（現在の備後庄原駅）で下車



分院・分病棟位置図

した負傷者は、庄原赤十字病院の救護員と地元住民の協力により庄原分院に收容されました。



原爆犠牲軍人の碑

軍医、看護師、地元

の婦人会などが総動員で看護に当たりましたが、同年10月9日の閉鎖までに80人が亡くなりました。遺体は、当時の町役場が地元住民の協力を得て、上野池奥地で火葬しました。その後、死没者の冥福を祈るため、昭和28年4月に宝蔵寺（東本町）境内へ「原爆犠牲軍人の碑」が建てられました。

●東城分院

昭和20年7月1日、県立東城高等女学校（現在の県立東城高等学校）に開設され、20人ほどの職員で回復期患者を診療していました。分院長は、8月6日午前9時ごろ、ラジオで「広

島市に新型爆弾投下、全市壊滅」という放送を聴き、負傷者が分院へ運ばれることを予測し、非常收容に備えていました。

8月7日、分院職員は広島第2陸軍病院本院跡へ駆け付け、救護を行い、13日に戸坂駅から芸備線で50人を分院へ搬送しました。

分院職員が広島へ救助に出ている間にも、東城駅には7日からの3日間で約250人の負傷者が次々に到着していました。分院に残っていた職員と疎開した軍人、地元婦人会、警防団が協力し、負傷者を担架や戸板に乗せて、駅から分院までの約700メートルを運びました。

しかし、ほとんどが重傷で、收容当日から毎日死亡者が続出し、9月20日の閉鎖までに299人が亡くなりました。

●山内分病棟

昭和20年8月7日早朝、戸坂分院から庄原分院に「山内西国民学校に收容所を開設せよ」との命令が伝達され、庄原分院職員が山内西国民学校（現在の山内小学校）に移り、地元住民の全面協力のもと、山内分病棟を開設しました。

分病棟には、寝具や炊事具などが無かったため、多数の民家から、敷布団、毛布、釜などの提供を受けました。

山内駅に到着した負傷者は、大半が重傷であったため、分病棟の全職員と疎開した軍人、地元住民が、駅から約500メートル離れた分病棟まで運びまし



山内地区で行われている慰霊祭の様子

た。

分病棟では、瀕死の負傷者が次々と発狂状態になり、看護は困難を極め、最終的には88人が亡くなり、遺体は学校裏の葛城山で火葬されました。

昭和33年3月には、地元婦人会が発起人となって寄付金を集め、「原爆犠牲者の碑」を建てました。碑は、現在の山内記念公園付近にあり、毎年8月6日に慰霊祭が行われています。（次ページに続く）

庄原市巡回平和パネル展「サダコと折り鶴ポスター」

2歳の時に被爆し、その10年後に白血病で亡くなった佐々木禎子さんの一生を通して、原爆被害の実相と平和の大切さを伝えるポスターを展示します。

原爆や戦争の悲惨さなど、風化させてはいけない記憶や記録を、ポスターを通じて学ぶとともに、これから後世に何を伝えていかなくてはならないかを再認識することのできる内容となっています。ぜひご覧ください。

とき・ところ

- ▼8月12日(木)まで 市役所本庁舎
- 1階市民ホール
- ▼8月13日(金)～19日(木) 市役所西城支所
- 1階オープンスペース
- ▼8月20日(金)～27日(金) 市役所比和支所
- 1階ロビー

※西城支所、比和支所は土・日曜日除く
問い合わせ
総務課総務法制係

☎0824・73・1123



おおした
大下 アサコ さん
97歳・口和町

大正13年に口和町で生まれ、看護学校卒業後、広島市で看護師として働いていました。悲惨な状況の中で救護に当たった大下さんに、当時の状況や体験、戦争や平和に対する思いを伺いました。

戦争の記憶

●原子爆弾の投下

当時、大下さんは広島陸軍病院手術室に勤務していましたが、原爆投下の1週間前、庄原分院へ患者を疎開させる準備のため、急ぎよ庄原へ行くよう命じられました。

予定していなかった庄原での勤務でしたが、それによつて被爆を免れることとなりました。しかし、広島陸軍病院に残った手術室の同僚は、残念ながら全員亡



当時の大下さん

くなったそうです。大下さんは「偶然にも命が救われて今日まで生きていることに、運命のようなものを感じる」と話します。

●悲惨な現場

原爆投下後、大下さんは、戸坂分院の患者の救護のために庄原から広島へ向かいました。

戸坂駅は少し高いところでありましたが、雲がかかって辺りはとても暗く、ひどい臭いが充満していたそうです。

分院の中では、負傷者が床に敷き詰められるように寝かされ、足の踏み場がないほどでした。

ショックで正気を失い、急に叫んだり暴れたりする

人や、発狂し階段から落ちて亡くなる人もいる中で、大下さんたちは昼夜を問わず看護を行いました。その後、どうにか体を動かすことができない人を連れて、戸坂分院から山内分院へ、芸備線の汽車で向かいました。負傷者は、乗客用の車両だけでは収まらず、貨物車にも乗せられ、汽車は足の踏み場がないほどの人で溢れていました。

●忘れられない光景

分病棟では、十分な薬がない中で、十数人の看護師が、多くの患者を必死に看護しました。

大下さんは、看護に当たるときに、いくつもの忘れられない光景を目の当たりにしたそうです。

ある日、背中全体を負傷した人が運ばれてきました。その人は被爆した際、窓に背中を向けていたため背中全体を負傷し、ずっとうつぶせで苦しうにしていました。必死に看護を続けましたが、乾燥により傷口がひび割れ、うじが湧き、



大下さんが当時の出来事や思いを記したアルバム

徐々に容体が悪化し、痛みが苦しみながら亡くなりました。

また、看護の最中に寝ていた負傷者が急に起き、「家族が来たので面会に行く」と言つて、他の寝ている負傷者を踏みつけながら、部屋を出ていこうとする行動がありました。負傷者の行動から家族への強い思いが伝わってきたようですが、そのような行動を起こす人は程なく亡くなってしまふことから、同じ光景を見るたびに、その人の死を予感したそうです。

分病棟ではその後、連日負傷者が亡くなり、ベッドの空気が増えていきました。

分病棟閉鎖後、大下さんは広島市の宇品病院などで働いていましたが、戦後間もなく、食糧難の影響により出身地である口和に帰ることとなりました。

●次世代を担う若者へ

取材の中で大下さんは、分院や分病棟での看護に加え、当時の広島の様子や患者との交流、戦争に対する思いなど、さまざまな経験や記憶を、写真を見ながら話してくださいました。

中でも印象的だったのは、戦地のニューギニア島で亡くなったお兄さんの話でした。

大下さんのお兄さんは、日本からの補給が絶たれて食料がなくなり、飢えて命を落としたそうです。

「兄が現地の人に必死で物乞いをし、その後飢餓で亡くなったと聞いたとき、どんなに苦しかっただろうかと胸が張り裂ける思いだった。あれほど辛いことはない」と涙ながらに語る大下さんの姿から、食料不足がいかに深刻だったか、



そして戦争の悲惨さが戦場にとどまらないということ、強く認識させられました。

また、大下さんは次世代を担う若者に対し「文章化された体験、記録を読むだけではなかなか分からないことも多いので、実際に戦争を体験した人の話を聞いて、自分で考える。その考えたこと、感じたことを、また次の世代に伝えてほしい。そしてそのことが、今後の社会を支える者の使命だと心に刻んでもらいたい」というメッセージを送りました。

私たちにできること

戦後76年が経過した現在、当時の体験を直接聞くことのできる機会は減少しています。

大下さんからのメッセージのように、一人でも多くの戦争を体験した人の話を聞き、自分なりに考えたこと、感じたことを、後世に伝えていく必要があるのではないのでしょうか。

70年以上たった現在でも記憶に残り続けるほど悲惨な出来事が、この庄原でも起きていたのです。

戦争の惨禍を繰り返さないためにも、私たちが「できること」「すべきこと」について考え、一人一人が少しずつでも行動していきましょう。

戦争体験者の記録

当時の体験を風化させないため、被爆体験記「葛城」が、「山内地区原爆被害者の会」により発行されています。

「葛城」は全3巻で、大下さんを含め、山内地区にゆかりのある戦争体験者が、当時の思いなどを寄稿しています。

田園文化センターや山内自治振興センターで読むことができますので、ぜひご覧ください。



被爆体験記「葛城」

令和3年度 庄原市戦没者追悼式 並びに平和祈念式典

本市の戦没者に哀悼の意を表すとともに、再び戦争の惨禍を繰り返すことのないよう、恒久平和を祈念するため、庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典を開催します。

なお、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、関係者のみで規模を縮小して開催します。

一般の人の参加はご遠慮いただきますよう、ご協力をお願いいたします。

とき
8月27日(金)10時

ところ
庄原市総合体育館

問い合わせ

社会福祉課障害者福祉係
0824-731210